

くらしの良品研究所の活動

facebookを利用して、読者のみなさんからのコメントやご意見を公開。ユーザー同士のご意見交換も可能になり、たくさんのご意見を共有できるようになりました。

www.muji.net/lab

防災プロジェクト始まります



防災への取り組みは、継続することがなにより大事です。そこで、再び、みなさんと一緒に「防災」について学び、実践していくプロジェクトを始めることにしました。まずは、3年前の「地震ITSUMO+ 無印良品」展の内容をご紹介することからスタート。その後、被災された方や「防災」に関わる専門の方、自治体、施設などにもうかがって改めて取材をし、最新の情報をお伝えしていく予定です。さらに、一緒に考えていく過程で発見する知識や事実、いざという時に活用できる方法も提案していきたいと思います。

「こどもめがね」商品化進行中



昨年夏に実施した「こどものめがねアンケート」には800名を超える父母の方からご回答をいただきました。それを受けて、11月には「こどもめがねモニター」を募集し、12月にはモニター座談会を開催。ご参加いただいた父母の方から、商品やサービスについてたくさんのご意見をいただきました。そうした貴重なご意見を参考に、現在、急ピッチで商品開発が進行しています。無印良品めがね取り扱い店舗(15店舗)にて4月上旬より発売開始予定です。取り扱い店舗 www.muji.net/shop

プロジェクトから生まれた商品

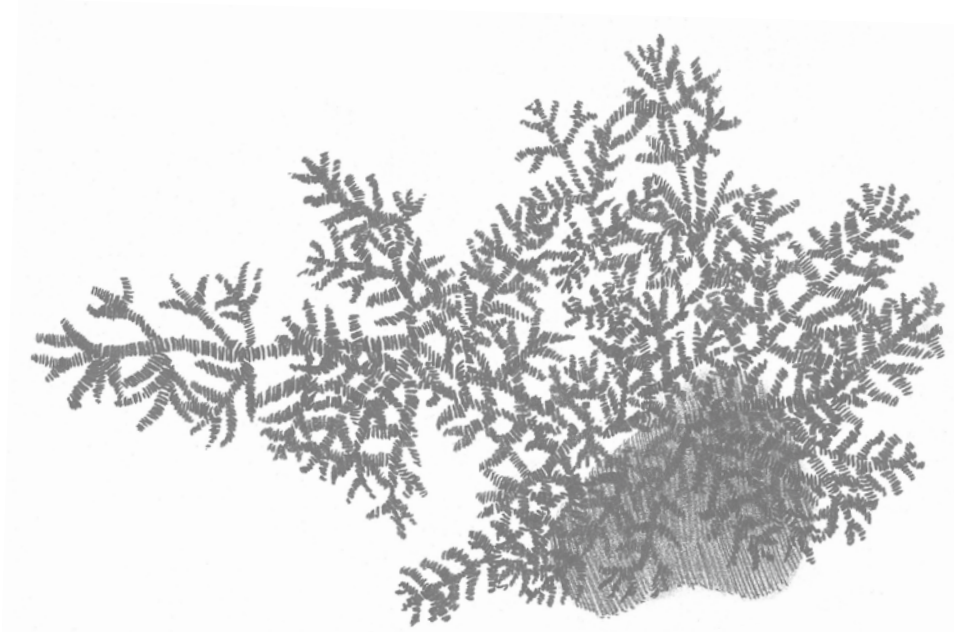


くらしの良品研究所で実施したアンケートやアイデア投票をもとに、商品化をめざしていた各プロジェクト。その中から、発売が決定したものをご紹介します。昨年春に実施した「フローリングモップケース」のアイデア投票からは、「自立するフローリングモップケース」を商品化。発売が遅れご迷惑をおかけしていましたが、いよいよデビューが決定しました。このほか、「旅の持ち物」プロジェクトから「キャリーオンバッグ」、「授乳にべりなウエア」プロジェクトから「授乳べりTシャツ」が発売中です。プロジェクトの詳細 www.muji.net/lab/project

くらしの良品研究所とは

「くりかえし原点、くりかえし未来。」を合言葉に、これからの時代に求められる良品像を、みなさんと一緒に探っていく「ラボラトリー」です。店舗とインターネットを介して、生活者であるお客さまと対話しながら、既存商品を点検し、新しい商品を育て、世界のより多くの人々に「これでいい」と共感していただける、感じいい暮らしのかたちを考えていきます。

◇この小冊子は、背表紙に付いた2つのリングをファイルの穴に通して、ストックすることができます。



no.03

緑とともに



無印良品



第3回
研究テーマ

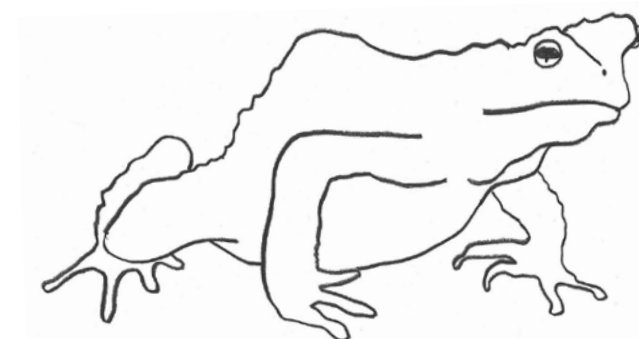
緑とともに

め・は・はな・み（ふたつで、みみ）… 植物が生育していく過程での名前は、なぜか、人間の顔の中にある名前と符合しています。古代の日本人は、植物の姿に人間を重ねて見ていたのでしょうか。緑に触れると気持ちが安らぐのは、私たち日本人のDNAに刷り込まれた遠い記憶が呼び起こされるからかもしれません。周囲に緑が減り、緑と向き合う時間が減ったこんな時代だからこそ、ゆとりある暮らしのために、「緑とともに」生きていく感覚を取り戻したいものです。

「魔女が住む」と言われるように、ヨーロッパでは、城壁の外の森は、迷うと殺されてしまうような場所。恐ろしいもの、人間の力の及ばないものにとらえられていました。そうした自然観は、彼らがつくる庭園の景観にも反映されています。幾何学的に表現されたそれは、自然を人間の力によって制御しようとする強い気持ちのあらわれとも言えそうです。

一方、日本人にとって、緑は親しみやすい身近なものであり、同時に神聖なものでもありました。それは、自然と一体になった庭づくりにもあらわれています。太古の昔、政（まつりごと）とは、神とつながるための儀式でした。そして、そのために美しくしつらえられた「場」が庭。庭の緑は、神様の目に留まりやすいようにつくられた飾りであり、お供えでもあったのです。天空から庭に降りてきた神は、緑や石に宿ると信じられ、神の宿った緑や石を、日本人は大切にしてきました。

眺める対象として、神とつながる手段として、神へのお供えとして、さまざまな意味を持ってきた日本の緑。ここでもう一度、日本人と緑との関わりについて考えてみましょう。



植物と月の関係

緑をデザインするガーデンデザイナーの塚田有一さんは、4年前から月の魅力にひかれ、月に生け花を供えるようになったといいます。植物と月との間には深い関係があり、それに気づいたことで、庭づくりの仕事も「月的な」感覚に変化していったのだとか。その月の魅力と、緑と月との関係について、聞いてみました。

月の満ち欠けと植物



潮の満ち引きに代表されるように、月は地球のあらゆるものに影響を及ぼしています。植物も、例外ではありません。例えば、木を伐採するなら新月の時に、と言われます。新月の時の樹木は、生命が静まっていて水分も少ないため、その後の狂いやカビなどが発生しにくく、道具の素材や建築の構造材として好都合なのです。逆に、花を切るには、満月に向かって行く時がもっともエネルギーが高く、香りもよいのだとか。植物内に水分が十分吸われているので、長持ちもするそうです。生命のリズムに大きな影響を及ぼしている月は、時として女性にもたとえられ、生命の源とも言われます。塚田さんが、こんな月に向かって花を供えるようになったのは、2007年。そのインスタレーションを始めたことで、さまざまなものがつながっていくのを感じたと言います。塚田さんにとって、ただ無心に花を生けることは、花や植物に対する自分の考え方や自然観を問い直すこと。なぜ生け花をするのか、なぜ庭をつくるのか、その答えを探すためのインスタレーションなのです。

なぜ月に魅力を感じるのか

太陽が陽であるなら、月は陰。月は、目に見えない世界のシンボルであり、世の中の仕組みの大事な極となります。目に見えるものはいつかは滅び無くなりますが、それに対して、目に見えない世界は命が生まれ、育まれていくところ。月の満ち欠けは再生をあらわし、万物が生まれ変わる力の象徴とも言えるのです。



新月（朔）



三日月



上弦の月



10日頃



満月（望）



20日頃



下弦の月



有明の月



月隠れ（晦日）

月を感じ、節供を祝う



塚田有一 ガーデンデザイナー
独自の自然観に支えられた庭づくりで知られ、「現代の茶人」とも評される。やさしく上品でありながら力強いその作品に、ファンが多い。自然の仕組みを感じさせる「庭師」をめざす。

こうした月の力を感じるために、塚田さんは「節供」を大切にしています。四季が美しく移ろう日本で、神に供え物をして季節の変わり目を祝ってきた、古くからの行事です。節供は、植物と深く結びついています。五節供で言えば、「人日（じんじつ）の節供／1月7日」の春の七草、「上巳（じょうし）の節供／3月3日」の桃、「端午の節供／5月5日」の菖蒲、「七夕の節供／7月7日」の笹、「重陽（ちょうよう）の節供／9月9日」の菊が、それ。他にも、お月見のススキ、節分の柊、冬至の柚子、お正月の松などなど。いずれも、旧暦であれば、その時季に旬を迎える植物です。現代の感覚では、旬と節供が合致しないものもありますが、本来の節供は「旧暦」にも

とづくもの。そして、その旧暦のもとになっているのが、月の満ち欠けなのです。旧暦のひと月は、新月（朔）から次の新月までで、「ついたち」は「月立ち」、つまり月齢を数え始める日。8月15日の「中秋の名月」に代表されるように、旧暦では日付けと月の姿が一致します。お盆の中心の7月15日は十五夜と決まっています。盆踊りは満月の月明かりの下で踊るものだったのです。かつて、人の暮らしは、月の満ち欠けに合わせて営まれていたことがわかります。「節供を行うことで、より強く自然の力を意識できるようになった」と語る塚田さん。月に向き合い、自然とより深く関わっていくその姿は、「現代の茶人」にふさわしいものでした。

新しい風は、畑から。

都会に住みながら、土や緑に触れ、自分で育てた野菜を食べる。
そんな暮らしを楽しむ人が、少しずつ増えています。
畑を教室に、プロの指導を受けながら野菜を育てる農業体験農園。
その仕掛け人のひとり、白石さんの「風のがっこう」を訪問しました。



畑と付き合うことは、生命や暮らしと向き合うこと。

「農業体験農園」という言葉をご存知ですか？ただ畑を借りるのではなく、農業のプロである農家の人に野菜作りのノウハウを教わりながら、その収穫物も手に入れられる農園。種や苗、肥料、農具も農家が用意してくれるので、失敗が少なく、手軽に野菜作りができる仕組みです。白石さんの主催する「風のがっこう」は、その第2号として1997年春に開園。練馬で始まったこの新しいスタイルの農園は、千葉や埼玉、茨城、福岡にまで広がり、今では全国で80軒を数えます。畑は出入り自由で、多くの人は週に2回程度通っているとか。週に一度しか来られない人もありますが、「自分で使える時間の中で取り組み、それぞれの楽しみを見つけてもらえれば

いい」という方針です。講習は年に16回。1講習につき3回のレクチャーがあり、利用者はその中で自分の都合のよい曜日に受講します。育てる野菜は、約25品種。利用者の要望を聞き、連作障害を避けながら、白石さんが決めていきます。人気が高いのは、トマト、きゅうり、トウモロコシ、枝豆、じゃが芋。採れたてを食べて、多くの人がそのおいしさに驚くのは、春菊や大根などの「間引き菜」です。「安全でおいしい野菜を食べたい」というのがほとんどの人の参加理由ですから、最初のうちは誰もが「収穫」をめざします。ところが、そのうち「ここで過ごす時間が楽しい」というふうに意識が変わってくるのだとか。と同時に、「何を食



1_正面入り口の看板。風見鶏が目印。2_収穫を待つホウレンソウ草 3_作業に来ていたご夫婦。「野菜作りは子育てに似ています」と。4_鶏も農園の仲間 5_収穫した野菜を手にする男性。食べきれないので、知人に配っているとか。6_畑の傍のレストランには、毎朝、白石農園から新鮮な野菜が運ばれる。このシェフも「風のがっこう」の受講者。

べたいか」ではなく「とれたものを工夫して食べる」というように、「食」に対する意識も変化していくのだそうです。その時季の旬のものをおいしくいただくのが、日本の食文化。目の前にあるものをいただくという暮らしは、つましいように見えるかもしれませんが、逆の見方をすれば、それは成熟や落ち着きとも言えるもの。「地味だけど、家族や食や地域を大事にする暮らしが本当の豊かさであり、そういったものは、実は、農村や農業の中にたくさん蓄積されている。それに気づいたとき、“この国をどうするか”という課題の中で、農業が役に立てることがあるはず」と白石さんは語ります。

畑を通して、人と人がつながる。

講習会で何度か顔を合わせるうちに、いつの間にか親しく言葉を交わすようになる。ベテランのお年寄りが、経験の浅い若夫婦にアドバイスする。農作業を通して、ここでは、ごく自然な形で人と人との交流が生まれます。白石さんが企画するさまざまなイベントも、農園での大きな楽しみです。トウモロコシ畑を背景に、サックスの音色が風に乗って鳴り響いたジャズコンサート。11年間続いている

ビニールハウスでのコンサートなどなど。参加者の中には、出演ミュージシャンのファンというだけでやって来て、初めて畑に触れる人もいます。そんな人が、「気持ちよかった、ありがとう」と言いながら帰っていく。間口が広く多様な関わり方が許される農業だからこそ、多くの人とつながっていけるのでしょう。心を病んだ人が、デイケアの場としてここに通り、少しずつ癒されていくのも、わかる気がします。農業(アグリカルチャー＝土を耕すこと)は、文化(カルチャー)の語源だと言われます。土を耕し緑と触れながら、人と人とのつながりや、わくわくする感動が生まれている「風のがっこう」は、まさに、そのことを示していると言えるでしょう。



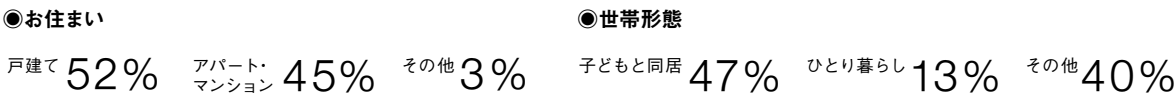
白石好孝 風のがっこう主催者・農家主
暮らしの中での農業の意味を問い続け、消費者とよりよい関係を結ぶためにさまざまなアクションを起こしている実践派農家の代表的存在。農業から食育する食農教育にも力を注いでいる。

大泉 風のがっこう
農業体験農園の先駆けとして1997年開園。野菜作りのノウハウを教えるほか、「フェスティバル・ビニール」など、多彩なイベントも。有志を募り、米作り農家の支援にも出かけている。

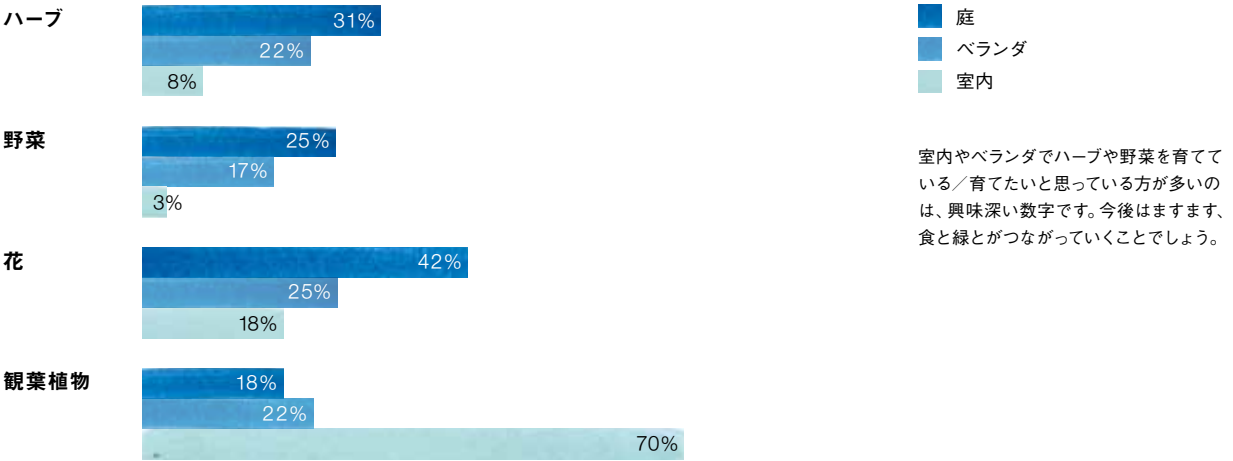
緑についてのアンケートレポート

私たちの暮らしに潤いを与え、彩りを添えてくれる緑。
そんな緑について、みなさんがどんなふうに考えていらっしゃるのかを
うかがうため、アンケートを行いました。
その一部をご紹介しますが、緑について一緒に考えてみましょう。

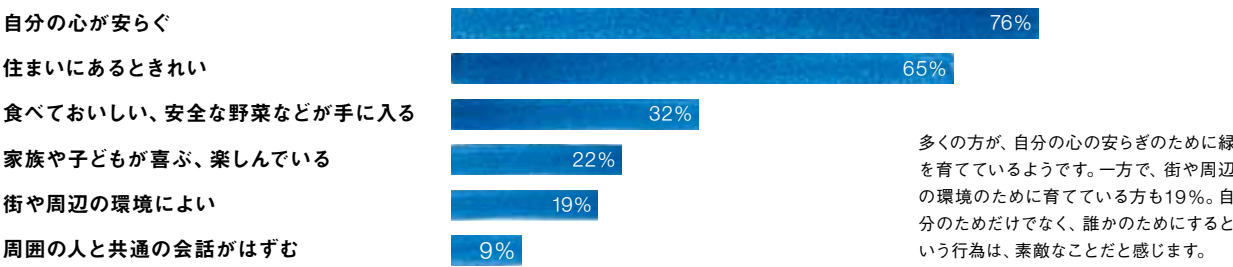
「住まいと緑についてのアンケート」 2010年12月実施 465名参加



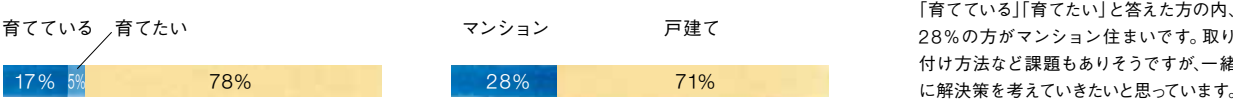
どんな緑を育てていますか？ または、育てたいですか？



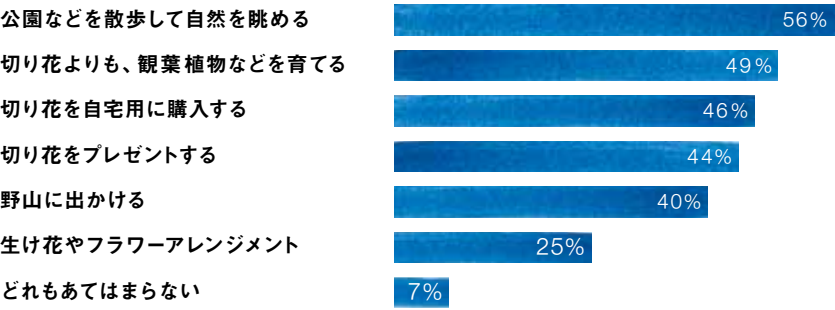
なぜ緑を育てていますか？



緑のシェード（日よけ）を育てている方と、お住まいの形態は？

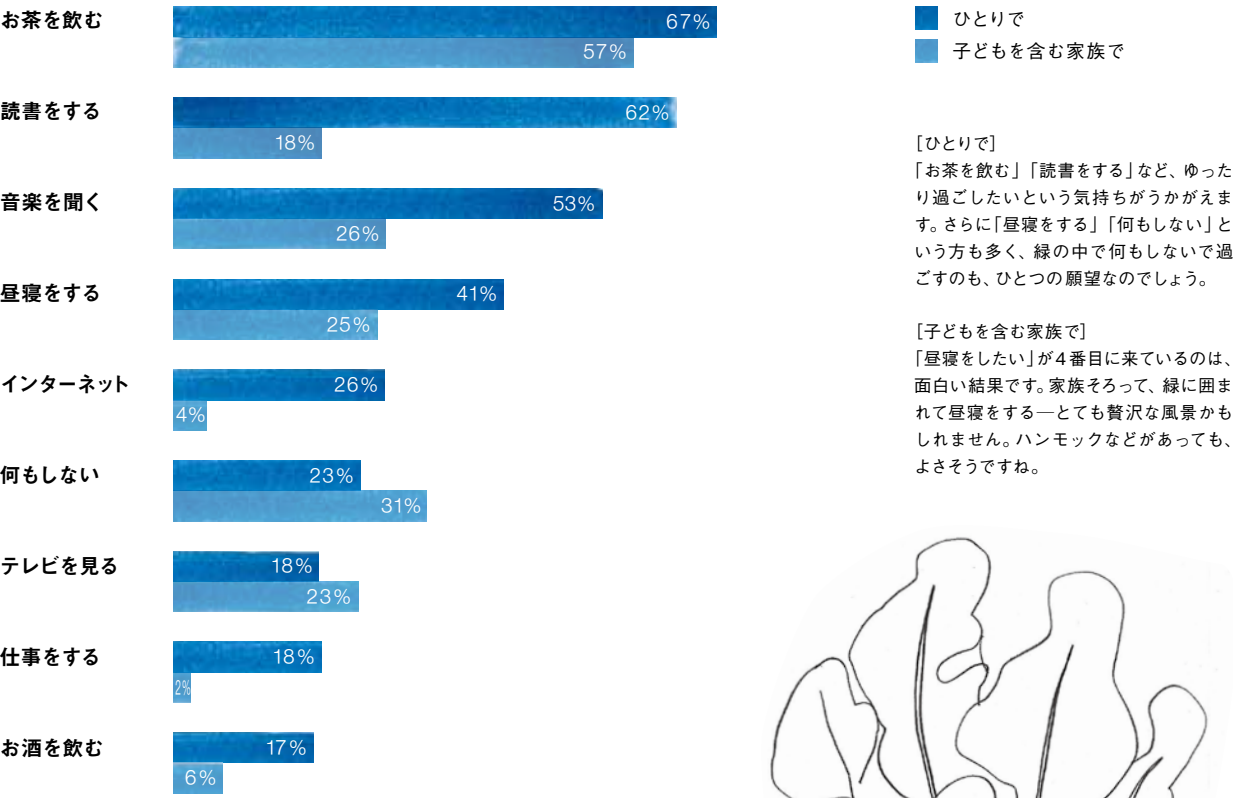


ふだん、どのように緑と接していますか？



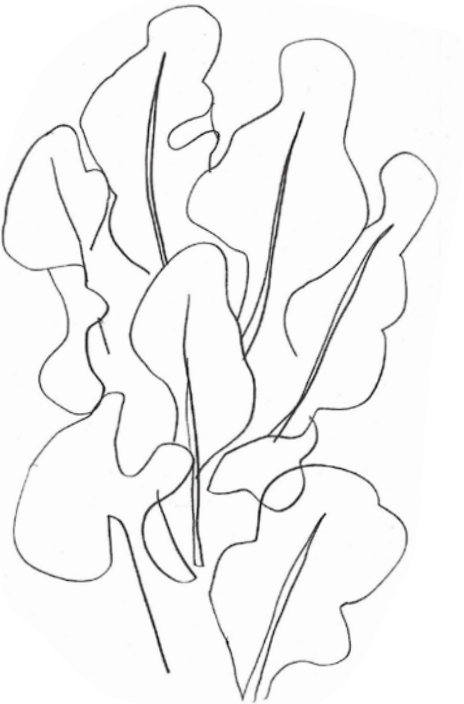
外に出て緑と親しむ時間を持つ人が多いようです。また、観葉植物を育てる、生け花、フラワーアレンジメントなど、緑と能動的にかかわる人が多いのも見逃せません。

緑に囲まれたり、眺めたりしながら、どんなことをしたいですか？



[ひとりで]
「お茶を飲む」「読書をする」など、ゆったり過ごしたいという気持ちがうかがえます。さらに「昼寝をする」「何もしない」という方も多く、緑の中で何もしないで過ごすのも、ひとつの願望なのでしょう。

[子どもを含む家族で]
「昼寝をしたい」が4番目に来ているのは、面白い結果です。家族そろって、緑に囲まれて昼寝をする—とても贅沢な風景かもしれません。ハンモックなどがあっても、よさそうですね。



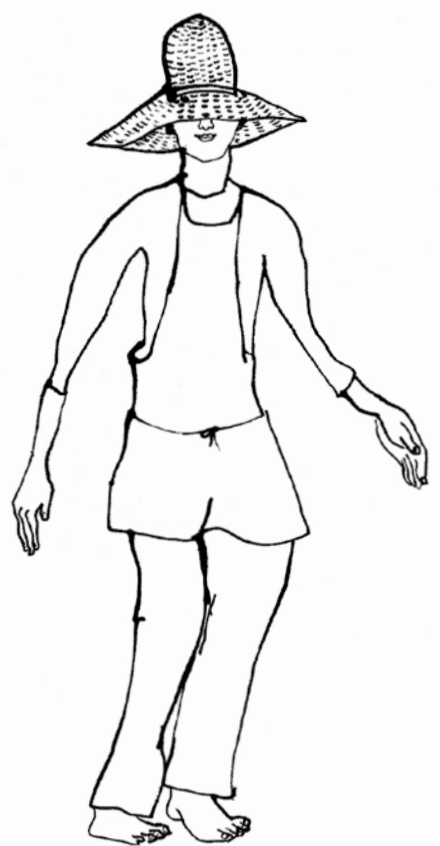
緑に囲まれて静かにのんびり過ごすことは、多くの人の望みと言えそうです。特に何かをするというのではなく、ただ、「緑の中にいる」ことを楽しむ。そこでは、ふだんは耳に入らないかすかな風の音や、植物の小さな変化にも気づかされることでしょう。日常の暮らしの中では、何もしないで無心になれる時間はなかなか取りにくいものですが、「緑」はそんな豊かな時間を私たちにもたらしてくれそうです。

緑と部屋

地球温暖化が進む中、クーラーだけに頼って暑さをしのぐ時代は、終わりに近づいているかもしれません。暮らしの中でできる省エネ対策を考えると、緑のシェードが心強い味方になってくれそうです。

緑のシェードとは

ゴーヤやヘチマ、朝顔などのツル性植物を窓や壁に沿って這わせた「自然の日除け」のこと。緑が夏の強い陽射しをさえぎって日陰をつくってくれるだけでなく、水を蒸散させて温度を一定に保とうとする葉の特性からも、周囲の温度を下げる効果があると言われています。現実的な効果に加えて、涼やかな見た目とアートのような美しさもポイント。実のなる植物を使った場合は、食べる楽しみもオマケに付いてきます。香りのよいものを使うと、癒しの効果も期待できるかもしれません。



くらしの良品研究所もチャレンジします。

今回のアンケートでは、緑のシェードを実行している人と今後やりたい人との合計が22%。緑を活用して「夏の涼」をとりたい人が増えているようです。まだ陽射しの強い9月いっぱいには枯れずに緑のままでいてほしいけれど、よく紹介されているゴーヤは、意外と早く枯れてしまうという声も聞きます。陽射しが恋しくなる季節には取り払いたいものですが、撤去は簡単にできるのでしょうか？ツルのメンテナンスや後始末は？緑のシェードには、どんな植物が適しているのでしょうか？先達のアドバイスを受けながら、くらしの良品研究所の研究員が、実際にチャレンジしてみることにしました。その経過は、みなさんのご意見もいただきながら、web上にリアルタイムでご報告していきます。

緑のシェードの実験プラン	
実験期間	2011年5月～10月
植える植物	ゴーヤ ・ きゅうり ・ テラスライム ・ さつま芋 朝顔 ・ 琉球朝顔（いずれも市販苗）
植える環境	千葉県船橋市 戸建て 地植え及びプランター
からませるもの	プラスチック製ネット
報告	くらしの良品研究所 webで毎月1回ペースで6回程度 www.muji.net/lab/report/green-shades.html

達人にききました。

実験に先立って、複数のツル性植物を同時に植えて研究している「NPO法人さやま環境市民ネットワーク」の本橋亮一さんにお話を伺いました。本橋さんはCO2削減のために自宅で緑のカーテンを作っているようになって4年目。最初はゴーヤを試みましたが、まだまだ日陰が欲しい時季に枯れてしまうので、もっと適した植物を見つけるために、数種類のツル性植物を同時に植えて観察記録をしたそうです。緑のシェードに望まれる一番のポイントは、下の表にまとめられているように、育てやすさと葉が緑を保つ期間。もちろん花や実を楽しめるに越したことはないのですが、シェードとしての役割を重視するなら、その辺を考慮に入れたほうがよいというのが本橋さんのアドバイスです。



本橋 亮一
NPO法人さやま環境市民ネットワーク役員。NPO法人さやま環境市民ネットワーク温暖化対策分科会委員としても活動。

適した植物と緑を保つ時期

種類	緑のシェードがほしい期間							
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
アケビ								
ゴーヤ								
きゅうり								
西洋朝顔								
琉球朝顔								

望ましい条件は？

- ・6月中旬～9月下旬まで緑である
- ・木漏れ日が漏れる程度の密集度（大きすぎない葉）
- ・軽い
- ・発芽しやすく、育てやすい
- ・病気になりにくく、虫がつきにくい（虫がついても、共存共栄できる範囲内ならOK）
- ・台風などの風雨でダメージを受けにくい（ネットも植物も）
- ・秋に撤去する際にネットから外しやすい

※花が咲いたり、よい香りがしたり、実が食べられる植物であれば、さらに楽しめます。

本橋さんの実験 4種類の植物を植えて経過を観察。



シェードのあるなしで、4℃の温度差！



シェードを横から見た様子。よしずを張ったような風情があります。壁を覆うスタイルではないので、空間を爽やかな風が通り抜けます。



花の数が多く上へ上へ伸びる西洋朝顔と、下へも伸びる習性のある琉球朝顔をミックスしたシェード。花を楽しみながら、下までの日陰を確保できます。

植物それぞれの個性を生かす。

朝顔やゴーヤは、自宅で採取した種からでも栽培できますが、あまりよく育たなかった体験から、本橋さんはホームセンターで買った苗を植えています。植える本数は、約7m分の窓を覆うのに3～4株。プランターの場合は大きめの40リットルを使い、1つのプランターにつき1株か2株にとどめます。ポイントは、それぞれの植物のシェードとしてきれいな時季や個性を知り、上手に組み合わせること。写真でもわかるように、キュウリやゴーヤが枯れ始める時季になっても、朝顔は元気で、ぐんぐん伸びています。本橋さんの実験では、西洋朝顔と琉球朝顔のミックス植えがよい結果となりましたが、今年もさらにいろいろ試してみるそうです。

ベランダプロジェクト

都会やマンションで暮らす人が緑を求めるのは、砂漠を旅する人がオアシスを求める気持ちに似ているかもしれません。庭がなくても、もっと緑に親しむ暮らしはできないだろうか？ そんな思いから、ベランダプロジェクトが始まりました。

ベランダ用ガーデンファニチャー

狭い空間を有効に使いたいというモニターのご意見から、
ベランダ用ガーデンファニチャーができました。
※お取り扱いは、Flower MUJI (ネットストア) のみです。

40cm角で構成
40cm角を基準に、その倍や半分のサイズで作りました。組み合わせても、すっきり置けます。



バラウ材とは
チーク材の1.5倍の強度を持つ東南アジア原産の広葉樹。防腐処理なしで15年以上の耐久性がありマレーシアでは桟橋や電柱に使われます。

ベランダで野菜やハーブを育てたい方におすすめのプラン。プランターなら、植物に合わせて用土を変えることも。



バラウ材プランター・大
幅40×奥行40×高さ27cm
税込 **6,300**円
玩具安全基準(ST基準)をクリアした安全性の高い塗料を使用。野菜栽培も安心です。

バラウ材プランター・小
幅20×奥行20×高さ27cm
税込 **3,150**円
玩具安全基準(ST基準)をクリアした安全性の高い塗料を使用。野菜栽培も安心です。



バラウ材ガーデンベンチ・大
幅80×奥行40×高さ44cm
税込 **12,600**円
六角レンチ付属で、すぐに組み立てできます。

バラウ材ガーデンベンチ・小
幅40×奥行40×高さ44cm
税込 **6,300**円
六角レンチ付属で、すぐに組み立てできます。



溶融亜鉛ガーデンベンチ
幅80×奥行40×高さ44cm
税込 **16,800**円
脚部は、錆びに強い溶融亜鉛メッキ仕上げ。雨や水やりで濡れても気にせずに使えます。

バラウ材デッキパネル
幅40×奥行40×高さ3.6cm
税込 **1,890**円



www.flower-muji.net



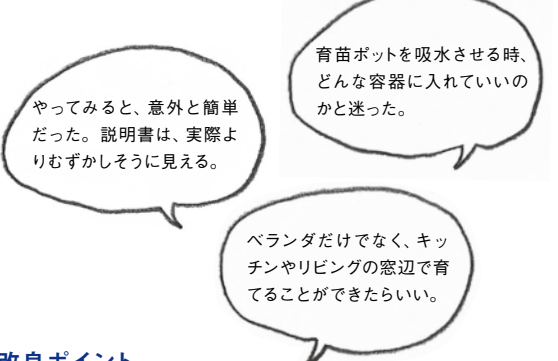
デッキパネルとベンチだけのシンプルなプランです。カフェ気分でお茶を楽しんだり、マットを敷いて昼寝をするにも。



ベランダを広く使いながら、四季折々の緑も楽しめるプラン。花壇のようにすっきりと、花々も「収納」できます。

ベランダ菜園

2010年春にデビューした野菜栽培キット。
同時に行ったモニタリングを通して寄せられたレポートや課題を参考に、改良を加え、新たな商品も生まれました。



改良ポイント

- 育苗ポットに専用カップを付けました。
苗が育つまでの間、育苗ポットを入れておくための専用容器を付けました。
- 取扱説明書を見直しました。
イラスト入りで、イメージしやすくなりました。
- 室内でも育てやすい野菜栽培キットを新発売
日当たりがよければ室内でも野菜を育てられます。



野菜栽培キット20L
ミニトマト・レッド、ミニキュウリ
とげなしナス 税込 **3,900**円
※お取り扱いには Flower MUJIのみ



野菜栽培キット5L
サニーレタス、グリーンリーフレタス
株立ちミニトマト 税込 **1,900**円
※お取り扱いには Flower MUJIのみ



栽培セット4号 底面給水タイプ
株立ちトマト 税込 **1,500**円
グリーンリーフレタス
サンチュ
※お取り扱いには無印良品、Flower MUJI、花良品



鉢の底から水を吸い上げる「底面吸水」方式を採用しました。水やりが簡単で室内でも栽培できます。

日本の産地から

無印良品で扱う国産の緑の一部を、生産者の姿とともにご紹介します。

バラ
rose



※お取り扱いは、Flower MUJI（ネットストア）のみです。

www.flower-muji.net

美しいバラを、より美しく育てて、美しいままに届けたい。

Flower MUJIで人気の高い「今月のバラ」の産地は、静岡県大井川流域。温暖な気候、豊富な水という恵まれた環境の中で、33軒の農家がバラ作りに励んでいます。この地でバラ栽培が始まったのは昭和30年代。日本の切りバラ生産の創始者とも言われる大矢好治氏に指導を仰ぎ、みんなで研鑽を積みながら発展してきました。平成5年には生産者の組織である「JAおおいがわ花卉（かき）協議会」が発足。そのバラ部会を訪ねて、ハウスを見せていただきました。畝と畝との間隔は、ずいぶんゆったりしています。当然、栽培面積は減りますが、こうすることで1本1本の花にしっかり陽があたり、風通しもよくなるのだとか。ハウス内は常

にバラの生育に適した25℃～30℃の温度に保たれ、土の上にワラを敷いてシミの原因になる高湿度を防ぐなど、手間ひまかけて慈しむように育てています。また、蕾の時期や開花期など、時期によって必要な栄養分が異なるので、その時期に応じた肥料を与えながら、毎月の土壌検査も怠りません。こうして丹精込めたバラは、収穫後30分以内に水揚げされ、その後、水に浸けて4時間。しっかり吸水させ、水入りバケツに入れたまま、花卉（かき）専用の低温輸送トラックで市場へ運びます。美しく育てたものを鮮度のよいまま届けて、永く楽しんでもらいたい。おおいがわのバラには、生産者のそんな思いも詰まっているのです。



1_流通の全過程で低温を保つコールドチェーンを採用。出荷を待つ間も、巨大な冷蔵庫で低温保存。2_花の品質や規格をていねいに確認。3_マイガールと名前のついたバラ。最近では花が大きく鮮やかなものが人気。

レモン
lemon



※お取り扱いは、Cafe MUJI、Meal MUJI、Cafe&Meal MUJIのみです。

www.muji.net/shop/cafemeal.html

海と山と太陽と。この島では、吹く風までもレモンの香り。

Café MUJIやMeal MUJIで使われている国産レモンは、瀬戸内産の大長レモン。年間を通して温かく雨も少なく、レモン栽培に最適と言われる島の産物です。そのおいしさの秘密を探るため、瀬戸内に浮かぶ小島を訪ねました。島に着いて目に入るのは、海と山と空と太陽。まばゆいばかりの海からの反射光と海風に乘って降り注ぐ天然のミネラルが、糖度10%という甘みの入った大長レモンを育てています。もうひとつの特長は、山の斜面を利用した段々畑。急斜面での農作業は決して楽ではありませんが、段々畑の照り返しも、甘みにひと役かっているのだそうです。大長のレモン栽培は、明治31年、みかんの苗木の中に3本のレモンの苗木が交

じっていたことから始まりました。大正時代には栽培面積が11haにまで広がりましたが、戦争のために日本に紅茶が入ってこなくなると需要は激減。（当時のレモンは、もっぱら紅茶用だったのです）そして1964年の輸入自由化の影響で、衰退の一途をたどっていきます。その一方で、安心安全な国産レモンの価値も見直されてきました。そんな中、「日本一のレモン産地計画」を立てて生産者をリードしたのが、JA広島ゆたか営農販売部長の金子さんと課長の山根さん。農家に無料で苗を配り、栽培に力を入れてもらうよう奮闘した結果、平成20年には日本一の生産量を誇るまでになったといひます。大長レモンは、自然と人との合作だったのです。



Café MUJI
Meal MUJI
Café&Meal MUJI

お店のメニューから、大長レモンのホットレモネード（左）とレモンスカッシュ（右）。完熟で収穫する国産レモンには、甘みがある。